

喜多流ヨーロッパ公演

新作英語能

『バゴダ』海外公演によせて



喜多流職分 大島政允

平成21年12月、NHKテレビにて放送された「海外ネットワーク」の番組の中で紹介された新作英語能『バゴダ』ロンドン公演を、ご覧になられた方もあると思います。2009年の11月末から約17日、ロンドン、ダブリン、オックスフォード、パリ四都市、計9回ヨーロッパ公演に行ってきました。

まずこの英語能に関わった経緯から申し述べる事とします。作者である中国系イギリス人シャネット・チョング女史との全く偶然の出会いからでした。旅行社の紹介で2007年11月、女史は友人と二人で宮島観光旅行の途中、私方の定期能公演にみえました。終演後の打ち上げの席へお二人をお招きした折、彼女より「今、オペラの台本を書いているが、今日能を見て、そのオペラを能としてぜひ上演してみたい」との申し出がありました。

今まで新作能を手掛けた事はありましたが、しかし、英語能となると全くとお手上げです。そこで、リチャード・エマーソン氏を紹介し、それが能として成立するものか相談されるよう勧めました。

ご存知のように、エマーソン氏は東京芸術大学に留学されて以来、四十年近く能の勉強に励まれ、福岡周斎師、松井彬師、大村定師に師事され、喜多流の謡・型はもとより四拍子も誠に堪能な方です。現在は武蔵野大学の教授として日本の学生達に能の事を教えておられます。又、母国アメリカでも能の普及に努め、「シアター能楽」を主宰し、シテ、ワキは元より地謡までの人材を育てられています。そして、これまでに八曲ほどの新作英語能を上演されています。今回の話にはエマーソン氏も興味を持たれ、台本の手直しから始まり、作曲・型付・演出と全てを取り仕切って下さいました。

シャネット女史はイギリスでは文化省の高官として活躍されていて、各国に広い人脈を持っておられるようで、今回のヨーロッパ公演があつという間に実現する事となりました。

曲の荒筋は英国の女性、作者の投影（ツキ）が中国に旅し亡き父親の故郷を尋ねます。そこで祖母（シテ）と伯母（ツレ）の霊と出会い、バゴダ（仏塔）を訪れ、貧しかった家族の悲惨な生活、幼い時の父親の悲しい家族との別離という話を聞き知るので、後半では菩薩（後シテ）の祝福のもと（父）後ツレも現れ、魂の世界で再会を喜び合つというものです。

周狂言の所の船頭も登場し、複式夢幻能の本格的なもので、上演時間は四十分の作品です。シテを大島衣恵、後ツレを大島輝久。囃子方は日本人、後は地謡を始め、シテツレ、ワキ、アイ狂言全てアメリカ人という異色の組み合わせでの上演となりました。

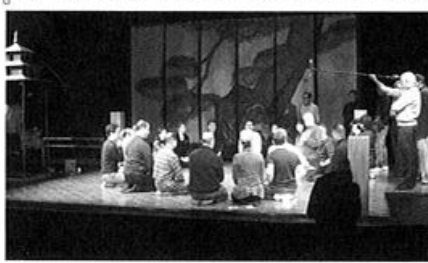
上演の四日前に初めてアメリカの人達とロンドンにて合流し、ロンドン大学のキャンパスで通し稽古が始まりました。そこで初めて英語の謡というものにふれ、三ツ地やツツケ謡と鼓とがどういった風に折り合せて行けるものかと思っていました。あまり違和感もなく調和しているのに不思議な気持ちになりました。



また、ワキとシテツレ役のアメリカ人女性達は演劇をしている方でもあり、体にちゃんと心が通っているのかなかなか大したものでした。また地謡も声質も良く声量豊かに調和のとれた謡い、ふりには大変感心しました。エマーソン氏の的確で熱心な指導、ふりが良く解りました。そして、いよいよロンドンでの初演の

日を迎えました。会場はティムズ湖畔にあるサウスバンクセンターの小ホールです。三百席ほどの客席は満席でした。ステージに4本柱を置き、鏡松はこれも日本在住のアメリカ人日本画家の手による掛軸を吊るして代わりとしました。

はじめに日本語の古典「清経」を私が務め、その後、新作英語能『バゴダ』の初演となりました。4日間の稽古の成果も現れ、シテの衣恵も何と、か英語をこなすし、囃子とも良く揃い、能の趣を伝える事ができたように思います。観客の方々も英語で良く理解出来たので、感動したと好評でした。



今回の公演を通して能の持つ力を強く感じました。特に外国の方には伝統の持つ無駄のない動き、洗練された型、ゆつたりとした豊かな謡のリズムなどが強く心を動かしているのだと思えました。日程的には少し厳しい面もありましたが、十七日岡沢山の外国の方々との触れ合いを持ち有意義な体験をしてきました。また、来年には日本での再演の話も持ち上がっています。その折には是非、ご覧下さいますようお願い申し上げます。